

人民大学との交流を通して感じたこと

1 回生の頃から「異文化交流Ⅱ」の講義について掲示がある度、受講を考えてはいました。その度に「海外は怖いから」という理由で受講を諦めてきましたが、最終学年になり、この機会を逃したら後悔すると感じ、参加しました。このエッセイでは、このプログラムに参加して感じたこと、考えたことを書きたいと思います。

中国、現地の農村を訪れて感じたことが同じ農村でも国が異なると発展の仕方や課題に対する方策も異なるということです。また、農村が抱える課題を考える上で、その土地の歴史的背景を知ることが重要だと考えました。

日本の農村と中国の農村で異なる点は「地域を思う心」であると私は感じました。日本では高度経済成長を経て、都市に人口が集中しています。農村には過疎化・少子化と課題が山積みの状況です。同じように中国も、先進国の仲間入りを果たそうとしている状況下で、農村人口が都市へ流出している課題があります。近頃では、都市人口が土地を求めて郊外へ移動している新しい課題も存在するそうです。日本では、過疎化した農村を盛り上げようとする動きが各地で見られます。その動きは農村地域外から働きかけるものもありますが、多くは農村地域に現在も暮らす住民自身によるものが多いと考えます。一方で、中国の農村へのアプローチは政府主導のものが主として挙げられるそうです。どうしてこのような違いがあるのか。その理由は良くも悪くも「地域を思う心」ではないのでしょうか。「自分たちの地域である」という意識が強い日本人は、農村を守っていくことに対して様々な取り組みを行っています。この意識が強すぎると、ヨソ者意識につながり、柔軟な考えができなくなる恐れもありますが、日本ではたいていの場合良い方向へ作用しているように思います。反対に、中国では農村への対策は政府がトップダウンで行っていることを考えると、農村住民自身の農村を大切にしたいという思いが少ないのではないかと感じました。しかし、日本では国が地方・農村へ積極的に手を差し伸べていない状況で、中国政府は農村の課題に対し税制などを通してアプローチしていることを知って、両国が相互に学ぶべき点はとまだまだありそうだなとも感じました。

私たちが今回訪れた農村は、戦中に日本軍に攻められ一度焼き払われた歴史がある村でした。通訳の先生に言われた「あなたたちがしたことではないけれど、被害にあったほうは忘れられないものだから」という言葉が忘れられません。日本国内では、メディアで戦後 70 年と言われるように長い年月が経ったように語られますが、よく考えれば自分の曾祖父や祖父の年代の話で遠い過去の話ではないのだと実感することができました。日本国内で育った私にとって、戦争の話は「日本は唯一の被爆国」であり、いつも被害者側のものばかりでした。今回のプログラムで、初めて日本を出てみて「日本が加害者側」でもあったことを強く感じるすることができました。

今回の交流を通して実地調査をするということは、現地の方の気持ちまで踏み込むものだとなりました。現地の方を傷つけることなく、より良い学習をするためには事前学習が

欠かせないと身を持って感じる事ができ、有意義な経験になりました。

(現地の様子) 農村の風景



